九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

ヌース・ポイエーティコスという問題 : ブレンター ノ解釈の検討を通じて

酒井,健太朗 九州国際大学法学部法律学科:准教授

https://hdl.handle.net/2324/7392673

出版情報:哲学論文集. 61, pp.47-72, 2025-09-27. The Kyushu-daigaku Tetsugakukai

バージョン: 権利関係:

ヌース・ポイエーティコスという問題

ブレンターノ解釈の検討を通じて

酒 井 健太朗

哲学者アリストテレスの使用する概念には、その内実の不明瞭なものが多い。「質料(ΰλη)」や「形相 (eiδog)」はもちろ

はじめに

んのこと、「第一原理(πρωτὴ ἀρχή)」や「幸福(εὺδαιμονία)」など枚挙にいとまがない。そのような諸概念の中でも最も難

解なものとして知られるのが、本シンポジウムのテーマおよび本稿のタイトルに含まれる「ヌース・ポイエーティコス(voŭç

ποιητικός) 」である。「ヌース・ポイエーティコス」は、アリストテレスが用いた言葉ではない(Shields 2016: 312)。しかし

この言葉が示す概念は、哲学史における巨大な問題の一つとして扱われてきた。つまり、この概念は難解なだけでなく、

明に取り組むべき重要なものでもあるのだ。 ヌース・ポイエーティコスという概念の内実について知りたくなるだろう。 そして研究書や解釈書を紐

その人は百家争鳴の騒ぎに巻き込まれることにになる。この概念に関する確定的な解釈など何も存在しない。

解いた途端、

そう聞いた人は、

ἀκίνητον)」や「神(θεός)」のような重要概念との関係が明確でないことも理由として挙げられる。 う。また、このテクストの記述が のような要素を含んでいるかもしれないが、それでも、ヌース・ポイエーティコスおよび『魂について』 エーティコスという概念の内実を知るための障害物があまりにも多すぎるのである。 化させている。さらに、『自然学』や『形而上学』等のアリストテレスの他の主張著作で登場する、「不動の動者 なぜそのようなことになるのか。この概念の「大元」である『魂について』第三巻第五章が短すぎることは原因の一つだろ (アリストテレスという哲学者においてはいつものこととはいえ) 古典的な哲学文献の解釈とはすべてそ つまり、 曖昧なことも事態を悪 第三巻第五章に関 ヌース・ポイ

してはその難解さが群を抜いていることを多くの人々が認めている(e.g.Theiler 1959: 142)。

置を浮かび上がらせるものであるという点で、本稿と問題意識を共有しているからである。ただしブレンターノの著作には ストテレスの心理学』と表記)である。というのも、彼のこの著作は、ヌース・ポイエーティコスという問題そのものの布 かり上、ある程度の解明はなされる)。むしろ、ヌース・ポイエーティコスという概念が示す問題がどのようなものであるか ノの解釈がアリストテレスのテクスト(およびそこでの主張)と整合性が取れているか否かは問題となりうる。 の点はそれほど問題とならない。しかし、この著作が含まざるをえない「アリストテレス解釈」という点では、 ンターノの『アリストテレスの心理学 ――とりわけ、彼のヌース・ポイエーティコスの教説について』(1867)(以下、『アリ 以上の点を踏まえたうえで、本稿ではヌース・ポイエーティコスの内実を問うことを直接の目的としない ブレンターノの解釈には アリストテレスのテクストに忠実に明確化することを目指す。その際の水先人となるのが、フランツ・ブレ (あるいは心理学観) が多分に反映されている。優れた哲学的業績としてのみこの著作を扱う場合には、こ 無理 がある。それを適切に理解するため、 水先区を出てアリストテレスのテクスト ブレンター

という外海に飛び出していく必要がある

本稿の構成は以下のようになる。

第一節では、

ヌース・ポイエーティコスに関わる

『魂について』

第三巻第五章のテクス

- 48

しながら確認する

を参照し、 受け入れ、 コ 必要とされた理由の一つが浮き彫りとなる。 アナクサゴラスの知性に関する説明をどのように用いているか確認する。 とが難しいと主張する。 でも第三巻第五章に五つの「知性」を読み込むという点に焦点を当て、 トを確認したうえで、ブレンターノによるそのテクストの解釈を参照する。 ス理解を示すことで、この概念が必要とされたもう一つの理由を明確化する。 それを 何を拒否しているのかを検討することで、アリストテレスの哲学的主張、 『分析論後書』と『魂について』のテクストから裏付ける。 第三節では、 『魂について』第一巻第二章および第三巻第四章を参照することで、アリストテレスが 第四節では、ブレンターノによる「心理学が論理学を基礎づける」という主張 その問題点を指摘することで彼の解釈を採用するこ アリストテレスが、アナクサゴラスの議論の何 第二節では、ブレンターノの包括的な解釈の 第五節では、 ひいてはヌース・ 私自身のヌース・ポイエーティ ポイエー ティコ ス

『魂について』第三巻第五章のテクストとブレンターノによる解釈

本節では、 ヌース ポ イエーティコスが論じられる 『魂について』 第三巻第五章のテクストをブレンターノの解釈を参照

る 本節で参照し、 ジウムの別の提題者の議論との重複も予想されるので)、ここでは、このテクストに含まれる「知性」についての彼の理解を 足がかりとしてブレンターノの解釈を確認したい。 の続きである。このテクストについての私自身の解釈は次節以降で徐々に示されていくことになる。ここでは、そのため まずは問題のテクストである。 (『魂について』第三巻第五章からの引用では、 それを次節で反駁するにとどめる。 『魂について』第三巻第五章は、 このそれぞれが適用される箇所に以下の α ~ ε の語句を挿入した) 。 ブレンターノによれば、 ただし、 その解釈のすべてを確認する余裕はないので(また、 その直前の第三巻第四章で開始された知性についての考察 ここには以 下の 五種 種類の 知性」 が含まれ 本シンポ

α... ヌース・デュナメイ (可能態にある知性

ヌース・ポイエーティコス (作用する知性

神的ヌース (cf. Brentano 1867: 182-183

魂のヌースの部分 (cf. Brentano 1867: 204-206

ε:ヌース・パテーティコス(表象の働き)(cf. Brentano 1867: 208–210)

以下が、 『魂について』第三巻第五章のテクストである。

自然の全体において、一方では何かあるものがそれぞれの 〈類〉に属するもののすべてである)、他方ではそれとは異なるものが、すべてのものを生み出すが 〈類〉にとっての素材であるが(またそれは、 可能

状態においてその

は必然である。実際、一方では、それがすべてのものになるということのゆえに、素材に相当する知性 ――このような事情にある以上、ちょうどそれと同じように、魂のうちにもそのような区別が成立していること [α]が存在し、

原因つまり作用し生み出す能力をそなえたものであり、後者は前者に対して、技術が素材に対するような関係に

光に比せられるような意味での、ある種の性向的状態である。というのも、光もまた、ある意味で、 他方では、それがすべてのものに作用し生み出すがゆえに、原因に相当する知性 [β] が存在する。 可能状態にある色 後者は、

に作用して活動実現状態にある色にするからである

ある。というのも、 そしてこの知性 また、 活動実現状態にある知識は、その対象となる事物・事象と同一である。ただし可能状態にある知識は、 [β] は、離在し、 作用するものは作用を受けるものよりも、 作用を受けず、混交せず純粋であり、その本質的あり方において活動実現状態に また始原はその素材よりも、 つねにより高貴だからであ 一個

人においては時間の上でより先であるが、 あるときに知性認識し、 あるときには知性認識しない、ということはない。 全体としては時間の上でさえより先なるものではない。 またこの γ

受けないが、 認識することはないのである。 れだけが、不死であり永遠である。しかしわれわれが記憶を欠いているのは、これ(roῦro)[α][β] そしてこの知性 作用を受けうる知性 [ε] <u>δ</u> は、 分離されて存在し、まさにそれであるところのものであり、それ以外ではない。 (III 5, 430a10-25) が可滅的であるからである。そして、これ(τούτου)[ε]なくしては何も知性 は確かに作用を

接的」にも作用を受けることになる(Brentano 1867: 221)。このαとβはδとして離存性・永遠性・不死性を有する なるが、感性的部分に含まれる前者が知性的部分である後者にどう作用するかが問題となる。そこで、「無意識」と理解され Brentano 1867: 204-206) 。というのも、それは人間が胎児のときに神によって付与されるものだからである(Brentano 1867: る」ような仕方で αの方へ惹きつける(Brentano 1867: 164)。それゆえ、 たβの出番である (e. g. Brentano 1867: 73)。βはεを「磁石がやすり屑を自分の方に持ち上げ、それからこの屑に触れられ αはεから作用を受けるのと同時に、 βから 間

α が

「二重」の作用を受けると論じる(Brentano 1867: 163)。可知的表象を含む ε が

αに作用することに

二. ブレンターノ解釈の査定

のブレンターノによる解釈がアリストテレス解釈として妥当なものか否かを検討する。 前節では、 『魂につい Ì 第三巻第五章のテクストと、それに関するブレンターノの解釈を簡単に確認した。 本節では、こ

師のような別の個人の知性がここで想定されていると考えることも不可能ではない。 的解釈」の可能性もあるからである。また、先立つ現実的知性として、 βが「魂のうちに」存在する人間的なものでありながら、常に思考し続ける神的なものでもあるという、 先立つ現実的知性としてβ(ヌース・ポイエーティコス)とは別の神的ヌースを必ずしも想定せずともよい。というのも、 III 7, 431a2-4) と関連づけながら、神的ヌースを要求するものだと理解している(Brentano 1867: 183, nn, 205-206)。しかし おいては時間の上でより先であるが、 というブレンターノの主張は擁護が難しい。ブレンターノはこの引用の前半部分「ただし可能状態にある知識は、 においては時間の上でより先であるが、全体としては時間の上でさえより先なるものではない。またこの知性は、 管見では、ブレンターノの解釈には少なくとも以下の二つの問題がある。 あるときには知性認識しない、ということはない」というテクストがア 全体としては時間の上でさえより先なるものではない」を、 神的ヌースではなく、たとえば生徒を教える際の教 第一に、「ただし可能状態にある知識 (神的ヌース) 他の箇所 について述べている いわば (III 6, 「半神半人 個人に

章の中にγを読み込むことはできない うか。「[……]われわれの思考内容(Gedanke)の発生が単なる偶然の所業であるというのは不都合な、 ではない。また、そもそもこの主張を受け入れれば、逆に人間の認識から偶然的なものが排除されてしまうのではないだろ ように思われる。それゆえ、仮に神と知性の関係に関するブレンターノの理解が正しいとしても、『魂について』第三巻第五 えある想定」だというブレンターノの見解(Brentano 1867: 187)は、 る必然性がある なものになると主張する ブレンターノは (Brentano 1867: 188-189)。 しかし、 (Brentano 1867: 183–188)° 『形而上学』2巻第七章〜第九章を参照しつつ、γがなければ人間の認識や心身の結合が偶然的 それの直接の根拠となる『魂について』のテクストが提示されるわけ 彼の理解では、それゆえに『魂について』第三巻第五章で γに言及す アリストテレスの認識論をかえって貧しいものとする いや笑うべきでさ

(ヌース・パテーティコス)

が表象の働きであると断定することも難しい。

ブレンターノがそう解するのは

知性と表象の働きの同定」

が、

第三巻第八章では「思考が表象内容であること」が認められないことから、

(Wedin 1988: 184)

ことはないだろう。 れも感受状態にない、という方に力点があり作用を受けないと端的に言われているわけではない(III 4, 429a15)。 いう例から分かる通り身体的作用の方が想定されている(I 4, 408b23-24)。もちろん、βではないαも身体的作用を受ける 知性が作用を受けないという特徴を持ち、 魂について』第一 彼が εと区別するところの α (ヌース・デュナメイ) も作用を受けないわけではない (Brentano 1867: 130–131) 。 巻第四章では知性が作用を受けないと一見述べられているように思われるが、ここでは 同書第三巻第四章では ε が 可可 「作用を受けて特定の感受状態にあるものではない」と述べられるが、こ '滅的」だと述べられているからである。 しかし、 ブレンター 酪 酊や病気」と

が想定されていると考えることもできる。さらに、 5 打となるようなテクスト上の証拠が存在しないのである。むしろ Wedin が述べるように、『魂について』第三巻第三章では 整合的に理解することも不可能ではない いうこと」であることを意味すると解釈することで、「思惟する対象を変える前でも後でも存続している」というαの特徴と 47, n. 13)が多用されている。 なるかもしれない。ただその箇所では「思われる」や「見える」、「おそらく」というように「断定を避ける表現」(中畑 2014 クストにおいても また、 れている (III 10, 433a9-10)。 たしかに先の第一巻第四章では知性が滅びないと言われているため(I 4, 408b18-29)、εを表象の働きと解 「表象の働き」が 同様に、ブレンターノがε解釈の際に根拠として提示する あるいは、ここで滅びないと言われているのは神性と接続される知性であり、 「一種の知性認識(νόησίν τινα)であると想定するならば」と一定の留保をつけて述べ (松浦 2019: 41, n. 13)。それゆえ、 可滅的であるということを「ある時に保持していた思惟的形相を失うと εが表象の働きを意味するという解釈には決定 (Brentano 1867: 208-209) βのことだけ 別のテ

張であろう。 人の 心に無意識 それを最古の心理学のテクストである の領域が存在するということは、 『アリストテレスの心理学』を執筆した段階でのブレ 『魂について』のヌース・ ポイエーティコスの議論に読み込むことは哲 ンター)哲学的

解釈はこのテクストの文脈にまったく合致しないものである可能性が高い

な理由を持ち合わせてはいないだろう。彼の無意識解釈が現在ほとんど参照されないのは、それが数ある魅力的な解釈の一 得的なものでなかった。少なくともそれは、 (あるいは哲学史的)に魅力のある戦略である。しかし、その理解に基づいたテクスト解釈は有無を言わせないほど説 現代の諸解釈(e. g. Polansky 2007, Shields 2016)よりも尊重されるべき積極的

三. アナクサゴラスとアリストテレスの知性論

つにすぎないからだと思われる。

がヌース・ポイエーティコスという概念が必要とされる文脈を哲学史的サーベイに基づき真剣に検討していたことは事実で を検討する いて、ブレンターノが示唆するだけではっきりと取り上げないアナクサゴラスの議論とそれに対するアリストテレスの態度 前節では、ヌース・ポイエーティコスの内実に関するブレンターノの解釈を受け入れづらいことが示された。 この問題意識に関しては私も賛同する。本節では、ヌース・ポイエーティコスという問題が位置づけられる文脈につ

ている。それは、『魂について』第一巻第二章と第三巻第四章に含まれる。 因としても理解されるべきことを説明する。彼がアナクサゴラスについて主に触れるのはこの箇所であり、 る(Brentano 1867: 235–236)。しかし、アリストテレスは本稿により関係する重要な箇所でアナクサゴラスとその説に触れ よれば、アナクサゴラスにとって神は原理=起動因であり、アリストテレス自身もそのような彼の説を好意的に紹介してい ブレンターノは『アリストテレスの心理学』の「附論」にて、アリストテレスにおいて神が目的因であるだけでなく起動

の三つの特質によって定義している。すなわち、 まずは第一巻第二章を参照しよう。 魂に関する先行研究を通覧するこの章では、「[……] すべての論者が、 動(運動変化)、感覚、非物体性である。そしてこれらの特質はそれぞれ、

ない。 に基づいた場合、 うモチベーションを有していたのではないだろうか たものを似たものによって知るとすれば、 者たちの見解から抽出された後 関する哲学者たちの諸見解が参照される。 各論者の想定する諸 アナクサゴラスの知性論を下敷きにしたうえで、その知性がどのように認識論で機能しているのかを明確化するとい が共有していると考えていた(I 2, 405b11-19)。アナクサゴラスはこのような人々と異なり、「作用を受けない」とい 他のものと共通なものを持たない」という性質を知性に帰している(I 2, 405b19-21)。 初期ギリシアの哲学者たちは、「一つの基本要素」 知性がどのように認識を行うことができるのかは不明瞭である(I 2, 405b21-23)。アリストテレスはおそ 々の始原にまで遡って関係づけられる」と述べられているとおり (I 2, 405b15)、その例外としてアナクサゴラスの主張が参照されていることである。 知るものと知られるものの間には何かしら共通のものが含まれていなければなら 重要となるのは「似たものは似たものによって知られる」という魂の規定が哲学 や「複数の基本要素」を、 (I 2, 405b11-13)、このような事 魂 (知るもの) と世界 ただし、そのような見解 知

ては、 制限のうえでとはいえ、 いう知性の規定は、「何らかの作用を受ける」という慎重な言葉遣いからも理解されるように、単純なものではない。 いと主張する (III 4, 429b22-26)。そのため、アナクサゴラス的な知性は知性認識を行うことができない。 用を受けることができないが、 この問題に対するアリストテレスの解答は『魂について』第三巻第四章で示されるが、それを見る前に次のことを確認し なものだろう 作用を受けないものであるという知性の特徴も救わねばならないものだった。 それに作用するものが必要となる。 アナクサゴラスの理解では知性は $(III 5, 430a18-19)^{\circ}$ 知性はある意味で作用を受けるとアリストテレスが考えていたことは事実である。 知性が認識するという目的を果たすためには「何らかの作用を受ける」のでなければならな そうすると、 この作用 「他のものと共通なものを持たない」という特徴を持っているために作 それは少なくとも同じ知性でなければならない。 するものは作用を受けることがなく、 知性が何らかの意味で作用を受けると 作用を受けるものよりも このように 「作用を受ける」と アリス

トテレスはアナクサゴラスの議論から、 ヌース・ポイエーティコスの必要性を取り出しているとも言える。

当する」と説明されることになる(III 4, 430a1-2)。それはともかく、当然、「特定の性質」が付与されてしまう「身体」と 知性は切り離されなければならないし、それゆえに知性の「特定の器官」も存在しない(III 4, 429a24-27)。 たのである(III 4, 429a22-24)。これは後ほど「終極実現状態としてはそのなかに何一つ書き記されていない書板の状態に相 を満たすために、 ていないもの」でなければならなかったというものであると説明されている(III 4, 429a18-20)。アリストテレスはこの条件 アナクサゴラス的な知性が知性認識を行うことができないという問題に、アリストテレスはどう答えているのだろ 可能的には様々なものでありうるが、それは現実的にはいかなるものでもないという特徴を知性に付与し 第三巻第四章では、アナクサゴラスの主張が、知性は「すべての事象を知性認識する」ために

うか。ここでアリストテレスが参照していると思われるアナクサゴラスの見解を、残されているその断片から引用しよう(cf を引き出している。言い換えれば、アリストテレスはアナクサゴラスの議論をいわば跳躍台として、自身の知性論を構築し ているのである。しかし、アナクサゴラスの知性論に対する、アリストテレスの以上のような批判的検討は妥当なものだろ 以上のように、アナクサゴラスの議論から、アリストテレスは作用を受ける知性と作用する知性の必要性とそれらの特徴

部分が含まれているからである。そして、一緒に混じり合ったものどもが知性を妨げ、 になるからである。 で何か他のものと混じり合っているとするならば、一旦何ものかと混じり合った以上は、 他のものどもはすべてのものの部分を分け持っているが、しかし知性は無限にして自律支配的であり、 (μέμεικται οὐδενὶ χρήματι)、単独にそれ自体として独立自存している。なぜなら、 なぜなら、すでに以前のところで [……] わたしが語ったように、 すべてのものにすべてのものの したがってそれは、 あらゆる事物を分け持つこと もし独立自存しない 単独に独立

知識 自存している場合に行なっていたのと同じようには、 を掌握し、 知性はすべての事物のうちで最も軽微にして最も純粋なものであり、すべてのものについてのすべての 最大の力を有しているのである。 すべてを知性が支配している。[……] (DK 59B12=LM D27 事物を支配すること(κρατεῖν) また、 魂 (の み) は備えているものたちについても、 が何らできないことになるであろ

大きなものもより小さなものも、

ない。 そのような言葉を用いていないということには注意する必要がある (cf. Carter 2019: 10)。アナクサゴラスはあくまでも、 認識を行うためには何らかの仕方で作用を受けることが必要であるという観点から批判していた。しかし、ここでの 性が「混じり合わず」そのゆえに「すべてを[……]支配」できると述べているだけであり、その意味で彼の議論に問題は を受ける(πάσχειν)」(あるいは「作用する(ποιεῖν)」)という言葉遣いはアリストテレスのものであり、 先に述べた通り、 なにか問題が存在するように見えるのであれば、その原因はアリストテレスによるパラフレーズにある。 アリストテレスは、 アナクサゴラスによる作用を受けないものとしての知性の規定について、 アナクサゴラスは 知性が知 知 用

は一可 同じく何らかの仕方で作用を受けるものでなければならない(III 4, 429a13-15)。また、「混じり合わない」という規定から べよう。 しつつも、 アリストテレスはなぜこのようなパラフレーズを行ったのか。もちろん、 能態」として知性を捉えるという可能性が生じる。 アリストテレスにとって知性は感覚とある程度までは類比的に捉えられるものであり、その観点から知性も感覚と その議論の不徹底さを救い、自身の認識論に応用するためであろう(cf. I 2, 405b19-23)。これをより具体的に述 アリストテレスはこのように、 知性論の創始者としてのアナクサゴラスを尊重 自身の認識論の構築に、 アナクサ

可能態の対である現実態としての知性が必要となる。 本 の目 1的にとって重要な点は以下のものである。 つまり、 知性が作用を受けることと可能態であることを整合的に捉えるには、 アリストテレスのパラフレーズには、 彼の哲学観が大きな影

ゴラスの議論を様々な仕方で利用しているのである

58

正しく理解していないからといって、それが哲学的に無価値だというわけではない。ブレンターノの無意識論も、 テレスの知性論も、それ自体として重要な哲学的意義を有しているだろう。 論を自らの哲学観に引き付けすぎたように、アリストテレス自身もまたアナクサゴラスの主張を歪曲している。もちろん、 響を与えている。そしてそれは、前節で見た通りブレンターノも共有するものである。ブレンターノがアリストテレスの議

匹 論理学を基礎づける心理学

関する私自身の解釈を提示する準備として、本節ではアリストテレスにおける論理学と心理学の関係について論じる わゆる「論理学(Logik)」と「心理学(Psychologie)」の関係について以下のように述べる。 ここでまず参照すべきは、やはりブレンターノの証言である。彼は『アリストテレスの心理学』の冒頭近くにおいて、 前節では、アナクサゴラスの議論をアリストテレスがいかに使用したかを示した。次節にてヌース・ポイエーティコスに

乏しく、萎縮したものとなったかといえば、それは論理学が自身の根を心理学の地盤のうちに下ろさず、そこから生命 の滋養を吸い取らなかったからに他ならないのである。 こうとする論理学はどれも、心理学の領分のうちへと掘り下げていくものであり、論理学が何ゆえある時代に、実りの

[……]しかし、論理学とわれわれの語っている心理学のかの部分より近しい教説が、他にあるだろうか。より深めてい

にまったく類似している。自然研究者の課題には、健康と病気についての教説の最初の諸原理を認識することが属し、 ストテレスが注記しているように、 そして論理学が心理学から諸原理を受け取るとすれば、心理学は論理学のうちに終わる。両者の学問の関係は、 医術と、 近代が生物学あるいは生理学と名づけたあの自然科学の部分との間 アリ

なる。それは何だろうか

それゆえにアリストテレスが言うように、 発して医術の教説を発展させている、ということをわれわれは見るのである。 ちの技術を営んでいる人々は、 ある人たちは医術の領分を自分の診察で終わらせてしまい、他の人々は自然科学から出 たいていの自然研究者や、 また医者たちのうちでより学問的な意味で自分た (Brentano 1867: 1-2

とが意図されているのだろう。 ということが述べられているので、 ブレンターノは **論理学と心理学の関係を医術と自然科学の関係から説明している。それぞれにおいて後者が前者に原理を提供する** 『感覚と感覚されるものについて』のアリストテレスの議論 前者のみで満足する人々はその基礎となる事柄を本当の意味で知ってはいないというこ (Sens. 1, 436a17-b1) に拠りつつ (Brentano 1867:

以上のブレンターノの解釈からは、

得される知見が論理学を基礎づける、という構造である。アリストテレスのおなじみの例を用いて、論理学を「われわれ う(cf. APo. I 2, 71b33-72a5, II 2, 413a11-13)。そうすると、心理学を自然本性的に先立たせている何かが存在していることに 本性においてより先である」ものあるいは 対してより先である」ものあるいは 知見を明らかに前提していることを踏まえれば(I 1, 402b16–403a2, II 2, 413a11–20, cf. 中畑 2014, 71, n. 3)、次のような構造を ス自身の見解であるとしよう。この見解は、『魂について』で示される学問の方法論が『分析論後書』に代表される論理学的 すなわちそれは、 **論理学的知見を持っていなければ心理学的考察を行うことができず、心理学的考察の結果として獲** 「明晰に理解されてはいないが比較的はっきりと現れている事柄」と、 心理学がある意味で論理学を基礎づけるということになる。 「明晰であり理に即していっそう認識される事柄」と表現することもできるだろ 「自然

つである」と述べたうえで、「魂の探究を最上位の知のうちに位置づけるのは、 たとえば アリストテレスは 『魂につい 7 冒頭で 「知るということは、 われ われの考えでは、 理にかなったことであろう」と主張する 美しくまた高貴なことの

仮にこれをアリストテレ

請であった。この要請を満たすものとして、いかなるものが考えられるだろうか。 であるように思われる。しかし今私たちが従っているのは、心理学が論理学を「基礎づける」というブレンターノの強い 魂が最も高貴なものであるから、 学問の特性として心理学が論理学に自然本性的に先立つということは可

獲得されるため、 論証の第一原理を把握している「状態」であった(cf. APo II 19, 99b17–19, 100b5–17)。彼の枠組みでは論証によって知識 ここで、基礎づけられる方の「論理学」の議論に目を転じてみよう。『分析論後書』のアリストテレスにとって、 知性は知識の原理でもある。この事情は、以下の二つのテクストが端的に示してくれる。

推論においては一つである無中項の前提が、そして論証と知識においては知性が端的なこと (端緒) である。

(APo. I 23, 84b39–85a1

が知識を持ちうる]事柄の全体に対して同様に原理であるという関係にある。(*AP*o. II 19, 100b14-17) 識の原理であることになるだろう。こうして、知性は原理の原理であることになろうが、知識は全体として[われわ [……]こうして、知識より他には、いかなる種類の常に真である性向をもわれわれは持っていないとすれば、知性が知

このように論証と知識は知性が基礎づけるが、逆は成り立たない。『分析論後書』を含む『分析論』全体のテーマは論証的知 提示することができる。ただしそれを問うのは、 識であるため(APr. I 1, 24a10–11)、「論理学」という枠組みの中ではこのような議論で終わっても問題ないだろう。 知性がなぜ論証的知識を基礎づけられるのかという問いや、知性をさらに基礎づけるものは何かという問いを 「論理学」の役割ではない。

そこで、論理学よりも高貴なものである「心理学」(魂についての学問)の出番である。そして今考察されているのは知性

するためにも重要なものなのである。 と基礎づけ くとも『分析論後書』(あるいは『分析論』全体)については、『魂について』 学」についての知見は の問題だったのだから、その学問のうちでも知性論に関わる部分をとりわけ参照する必要がある。 『魂について』の探究方法として必要とされるものだが、 それゆえ、 アリストテレス哲学のカリキュラムとしては、 以前に学習されておく必要があるだろう。 その書における知性論の重要な役割を認識 論理学的著作の中でも少な つまり、

五.ヌース・ポイエーティコスの役割

ターノ 前節では、 の見解の一定の妥当性を示した。本節では、このような枠組みのもとでヌース・ポイエーティコスが果たす役割を示 『魂について』に加えて『分析論後書』 の議論を参照することで、 心理学が論理学を基礎づけるというブレン

す。 ス・ポイエーティコスが作用することによって成り立つのではないか。 430a26-b6) る 論証の第一原理を把握しているだけでなく、それを当該学問の第一原理として把握するという能動性が求められるからであ くヌース・ポイエーティコスは感性的部分に作用する一方で、ブレンターノが述べるところのヌース・デュナメイにも ティコスが感性的部分に作用することで、表象内容を知性的部分へと惹きつける働きを持つと考えていた。 ストテレスの レンター 酒井 前節で言及されていた知性と基礎づけの問題へと戻ろう。先に参照したように、ブレンターノはヌース・ポ ノの理解と異なり) 2020: 185-194)° 特定の学問の原理として措定したりという高次の知性認識は、 「形相の場所」という表現から明らかだ(III 4, 429a27--29)。ただ、そういったものどもを「結合」したり 本質や原理が成立するのは知性、 間接的にではなく直接的に作用する。というのも、 すなわちヌース・デュナメイの中だけである。 というのも、 それらを含んでいるヌース・デュ 論証的知識の原理としての知性には ヌース・デュナメイには それは 「一可能的であ ナメイにヌー アリ

は、 に含まれるものである)。 状態への移行) でもその能力を使用できる状態への移行)と、 との能動性が担保されねばならないように思われるからである。つまり、ヌース・デュナメイは概念形成や概念把握に関 るときに」伴われるものにすぎないのであれば る」ということ以外には、いかなる本性であってもいっさい属さ」ず(III 4, 429a21-22)、表象内容は この両者のうちの後者を論じるものである。 ヌース・ポイエーティコスはその概念の使用に主に関わるのではないだろうか(これらはいずれも知性認識活動の のいずれに関わっているのかということが古来問題となってきた (cf. Kosman 1995)。本節における私の考察 ヌース・ポイエーティコスについては、 第二可能態ないし第一現実態の第二現実態への移行 (III 8, 432a8-9, cf. III 7, 431a16-17)、それらとは別の場所で知性認識するこ 第一可能態の第二可能態ないし第 (能力を実際に行使する 一現実態への移行 「知を行使して観想す

考察を進めるため、第三巻第五章の以下のテクストを再度参照しよう。

また、 きに知性認識し、あるときには知性認識しない、ということはない。(III 5, 430a19-22) おいては時間の上でより先であるが、全体としては時間の上でさえより先なるものではない。 活動実現状態にある知識は、その対象となる事物・事象と同一である。ただし可能状態にある知識は、一 またこの知性は、 個人に

現状態にある知識 むことができる。 このテクストは後世の付け足しであると考えられることが多い(Shields 2016: 324-325)。実際、 きに突如として別の認識状態である知識の話題に切り替わっており、 そのため、] を観想活動における知識と理解し、 第三巻第四章末尾の次のテクストも参照しよう。 概念形成と概念使用の観点から捉えれば、このテクストはうまく読 解釈が難しい箇所である。 知性について論じていると しかし、ここでの

て実際に観想活動を行うためには、

可能態としての知識に先立つ何かが必要である

.知性認識している状態にあるのではないことの原因については、 観想的知識 素材を伴わないものの場合には、 (ἡ... ἐπιστήμη ἡ θεωρητική) とそのような仕方で知られるものとは同一である(ただし、 知性認識しているものと知性認識されているものは同一だからである。 後に考察しなければならない)。(III 4, 430a3-5 知性がつ 実

れるだろう。 対象の 先の引 識を単に所有している状態ではなく、それを実際に使用することにヌース・ポイエーティコスが関わっていることが理解さ 所では述べられているのである。その箇所がヌース・ポイエーティコスを説明する文脈であることを踏まえれば、 ないし観想的知識が対象と同一であるためには、 「同一性が語られ、 用 、箇所は、 明らかにこの箇所に対応し、 それが観想的知識とその対象の同一性という例で説明されている。そして、 これを説明するものである。ここでは、 それらが可能態であるのではなく現実態であることが必要だと先の引用 知性認識する主体と知性認識 知性認識しているもの 概念や 知 箶

である。 同じ人の現実態としての知識に時間的に先立つものの、「全体としては時間の上でさえより先なるものではない」という文章 され、その「原因」が 三巻第五章からの引用箇所で示されていると予測できるだろう。そこで注目すべきは、個人における可能態としての知識は テクスト解釈を続けよう。第三巻第四章からの引用では「知性がつねに知性認識している状態にあるのではない」と注 個人的観点ではなく全体的観点からは、 「後に考察」されると語られる。前段落における私の想定が妥当なものであれば、 (®) 可能態としての知識に先立つ何かが必要とされる。 つまり、 その理由も先の第 現実態として

状態にあるのではない」と述べられるのは、 るように思われる。 「何か」が、「その本質的あり方において活動実現状態にある」(III 5, 430a18) つまり、 次のようなことがここでは想定されている。 知性認識が作用を受けて成立することを踏まえれば、 第 二巻第四章で ヌース・ポイエーティコスのことであ 「知性がつ 作用を受けておらず可能 ねに知性認識、

たのである していないということが明らかになり、それを踏まえたかたちでの「知性」と「知性認識」という言葉の使用が明らかになっ

第三巻第五章に至り、その成立要件であるヌース・ポイエーティコスが登場したとき、それがないときには知性認識が成立 述べられ、その知性認識を成立させるために必要なものについての言及は慎重に避けられていたことに注意する必要がある。 のものが想定されているのである。また、第三巻第四章の段階では、成立した知性認識とヌース・デュナメイのことのみが

ただし、以上のような解釈には次のような反論が想定される。アリストテレスは感覚と知性を類比的に捉えており、その

と知識対象が同一であるという議論や知性の自己認識が言及されるのは、 観点からは、 知性対象は同 イエーティコスは作用すれども知性対象たりえないのではないだろうか。この反論に応答するには、 知性対象) から作用を受けるということになる。 感覚が感覚されうるもの(感覚対象)から作用を受けて成立するように、知性の場合も知性認識されうるもの であるというアリストテレスの主張を参照する必要がある しかし、知性対象という役割を担えるのは可知的表象であり、 このような知性理解を導くための伏線であろう。 (cf. III 7, 431b17)° 第三巻第四章~第五章で知識 現実態としての知性と ヌース・ポ

λ (τούτου)

[作用する知性]なくしては何も知性認識することはないのである」(III 5, 430a25)。

それゆえ、 作用する知性が作用することは知性対象が作用することと同義となる。このような特殊な経路を辿るために、

用する知性には常に現実態であるという特徴が付与されたのだろう。

認識を成立させると言われるヌース・ポイエーティコスが、可滅的な他の事柄と異なって「不死であり永遠である」うえに 構造を提供するからこそ、『分析論後書』で展開される「論理学」の原理として機能できるというだけではない。 心理学が論理学の原理たりえる理由であると思われる。 は事実だからである (III 5, 430a18, 23)。アリストテレスの想定する不動の動者ないし神の特徴と一致するこれらの規定こそ、® おいて活動実現状態にある(τῇ οὺσίᾳ ὢν ἐνέργεια)」や「不死であり永遠である 放することを意味しない。というのも、 を付与せずともすむ。ただしこれは、『魂について』第三巻第五章やヌース・ポイエーティコスについての議論から神性を追 「その本質的あり方において活動実現状態にある」からこそ、 このように理解すれば、 ヌース・ポイエーティコスそのものに「常に知性認識する」という神以外には適用 以上の解釈が正しいとしても、 つまり、『魂について』が第一原理を代表とする様々な事柄の認識 われわれの認識やそれに基づく「論理学」は実行できる。「こ ヌース・ポイエーティコスに「その本質的あり方に (ἀθάνατον καὶ ἀΐδιον)」という規定が残るの が われ 難 わ n

認識論的のみならず存在論的にも基礎づけている。 人間 体」に関わる。 ヌース・ポイエーティコスは、「魂のうちにもそのような区別が成立している」(III 5, 430a13-14)と述べられることから 0 魂に含まれるものであるが、 そしてそれは、 その神性のゆえに、 先に見たように神性を併せ持つ半神半人的なものであり、その意味で個人を超えて「全 常に現実態であり続けることで諸学問を代表とする人間の認識的営みを これが、 本稿の提示するヌース・ポイエーティコス理解である

め。これらこそ、ヌース・ポイエーティコスという問題が生じた文脈なのである。 であるアナクサゴラスの主張を救い、それを乗り越えるため。第二に、 アリストテレスがヌース・ポイエーティコスを必要としたのには二つの理由がある。第一に、知性論に関する先行哲学者 論理学の基礎としての心理学をさらに基礎づけるた

にあるのは、「重要なところで神に頼るのか」という疑念だろう。しかし、彼の哲学を理解するうえでは、神性が影響する余 地をまったく認めない方が問題である。本邦の二人の研究者の発言を参照しよう。 識論を説明するための「機械仕掛けの神」のようなものになっているのではないかという批判が予想される。この批判の核 人間性と神性の両者をそこに認める本稿のヌース・ポイエーティコス理解については、それがアリストテレスの認

はるか先を見据えていた。アリストテレス哲学のこのような「ハードな部分」を切り捨てる代償は、 紆余曲折を経て、純粋な「本質・形相」に辿りつくその探求は、明らかに、純粋な現実態 魂論がそうであった。生の階層を漸次的に上昇していくその過程は、どんなに少なく見積もっても、 しかし、アリストテレスの哲学が確かに「神」を志向しているという事実は動かない。実体論がそうであった。 (純粋形相) に連なるもので 計り知れない。 人間的生の

[……](金子 2011: 286-287

えた何かがはたらいているということであろう。そのような超越的条件は、アリストテレスにとってはもしかすると おそらくアリストテレスが示唆しているのは、 それぞれの人間の思考や学びに、 それを可能とする条件として個人を超

考え思考するためには、個人とその身体の(現代ならとりわけ脳の)能力を超えるものが存在することが必要であろう。 「神」という言葉で表現されるものかもしれない。 しかしそれをどのように考え名づけるかを別としても、 人間がものを

[……](中畑 2014: 487

このような主張は、 考察を経てきたわれわれはその基本的姿勢を共有し、それを適切に評価することができる。そしてブレンターノにしろわ イエーティコスを無意識と理解したのは、 「ハードな部分」から逃げることもなかった。それゆえ、ブレンターノの解釈を仮に受け入れられないとしても、これまでの ヌース・ポイエーティコスそのものを神と同一視することを拒否したが、神というアリストテレス哲学の ブレンターノがすぐれた哲学者にして解釈者でもあることを再確認させるものである。 中畑が述べるところの「個人を超えた何か」を想定していたからだろう。そして 彼がヌース・ポ

註

めていった結果としてどうしても要請されるものだと主張するのである。

ヌース・ポイエーティコスとは、それさえあればすべてが大団円になるようなものではなく、

われにしろ、

 $\widehat{1}$ 本稿は、二〇二四年九月二十八日に開催された令和六年度九州大学哲学会のシンポジウム「ヌース・ポイエーティコスとの向き 号:21K12837との共催)) における、 ただいた村田憲郎氏 合い方」(科学研究費・若手研究「『魂について』を核とするアリストテレス認識論の再構成」 た方々に御礼申し上げ (東海大学)、司会をしていただいた倉田剛先生 同タイトルの発表原稿に加筆修正をしたものである。本シンポジウムで提題者となってい (九州大学)をはじめとして、当日の議論に参加していただ (研究代表者:酒井健太朗 課題番

2 なお、以下で論じられる「知性」とは、 第三巻第四章~第八章の主題である「観想にかかわる知性」 のことであり、 実践にかか

哲学的考察を進

- わる知性ではない(cf. II 3, 415a11–12, 中畑 2014: 79, n. 11)。
- (3)「プレンターノの解釈を採用するか否かにかかわらず、この一つの短いテクストが引き起こしている複雑さを、彼の議論がどのく らいうまく説明しているかを正しく理解することは有益である」(Shields 2016: 313-314)。
- (4)アリストテレスの著作からの引用と参照については、巻、章、ベッカー版のページ数と行数を、LSJによる著作名の略号を加え 以下同様 版を底本として訳文や訳語を断りなく変更した箇所も多い。また、() は原語を、[] は筆者による補足ないし説明を示す。 て指示する(『魂について』のみ、著作名の略号を省略している)。引用の際には参考文献に挙げている邦訳を参照したが、OCT
- (5)『アリストテレスの心理学』の訳については、この著作の読書会にて使用する目的で村田憲郎氏が作成されたものを御本人の許可 筆するにあたって、村田氏はもちろんのこと、読書会に参加されていた池田真治氏(富山大学)からも様々な有益な示唆を頂戴 を得たうえで用いている。ただし、ドイツ語原文と照合し、一部の訳や表記を断らずに改めた箇所も存在する。(なお、本稿を執
- (6)ブレンターノは、ヌース・ポイエーティコスと同じくヌース・デュナメイも不滅なものだと考えていた。「第二に、この能力は魂 デュナメイが、精神的であり不滅であるということである」(Brentano 1867: 143)。 をこめられた身体の能力ではなく、ひとえに魂の能力であり、それゆえ思考内容(Gedanke)を受け取る知性が、つまりヌース・ した。この場を借りて御礼申し上げる。)
- (7)それでは、『魂について』第三巻第五章との整合性が仮に取れれば、ヌース・ポイエーティコスが無意識であるというブレンター うであれば、世界が無意識的な因果関係から成立していることを根拠として、魂の精神的部分においても無意識の作用を担保し り上げる(Brentano 1867: 69-70)。しかし、そのような主張をたとえば『魂について』のテクストから裏付けることは難しい。そ として、(アリストテレス的) 世界が諸々の実体間の「無意識的な因果関係」から成り立っているということをブレンターノは取 ている。その見通しの一端を示すとすれば次のようになる。ヌース・ポイエーティコスを無意識能力として導出する根拠の一つ なければならないと主張することも擁護できないだろう。 ノの解釈は妥当なものとなるのだろうか。本稿ではその可能性を詳細に検討することはできないが、私は悲観的な見通しを持っ
- (8) この箇所は本来、 知性が自己認識するとすれば、認識する側と認識される側に共通のものがなければならず、それはアナクサゴ

- 矛盾を解消するために、「素材を伴わないものの場合には、知性認識しているものと知性認識されているものとは同一」であると ラスによる「他のものと共通なものを持たない」という知性の規定と矛盾する、 主張することになる(III 4, 430a3–4)。 という議論に関係する。 アリストテレスはこの
- 9 ヌース・ポイエーティコスの常に現実態であるという特徴については、 内にも」(DK 59B14)。ただし LM D28では異なった校訂が採用されており、そちらを採用した場合には常にあるという性質を知 取り囲む多なるもの(いまだ未分離なもの)の内にも、(それから)分離してきたものの内にも、またすでに分離しおえたものの 性に帰属させることはできない。なお、アナクサゴラスの断片については、内山 et al. 1997の訳を参照した。 知性は常にあり(ûcí éorn)、いまも歴然として、他のすべてのものがあるそのところに、それはある―― アナクサゴラスの以下の見解も影響しているかも
- 10 アリストテレスはアナクサゴラスに高い評価を与えている。「だから、或る人[アナクサゴラス]が知性を動物のうちに存するよ 人で、これにくらべるとこれまでの人々はまるでたわごとを言っていたものかともみえたほどである」(*Metaph.* A 3 うに自然のうちにも内在するとみて、知性をこの世界のすべての秩序と配列の原因であると言ったとき、この人のみが目ざめた
- 11 「アナクサゴラスの知性についてのこのような特徴づけはアリストテレス自身の概念的枠組みにもとづく」(中畑 2014: 33, n. 35)。
- 12 アリストテレス解釈におけるアナクサゴラスの重要性については、Kosman 1995や Carter 2019を参照
- そしてさらに、作用を受けるものだという感覚や知性の特徴も、 るように思われる のである(cf. I 5, 410a25-26)。そのため、彼はアナクサゴラスと他の先行哲学者たちの見解を調停させるという目的も有してい アリストテレスが先行哲学者たちの見解から引き出してきたも
- (14) ブレンターノは、ヌース・ポイエーティコスの考察という心理学的探究を終えたうえで、それがアリストテレスの論理学 論後書』の最終章)の議論とも一致する、という考察の手順を踏む (Brentano 1867: 211-215)
- 15 ブレンターノは「[……] 論理学的な書物のどこでも(同じことは 直接に論じられているところはないからである」と述べる れておらず、ヌース・ポイエーティコスを伴うその分析は 『魂について』で行われる。 (Brentano 1867: 39)。『分析論後書』では知性認識活動の内実が示さ 『形而上学』にも当てはまる)、 ヌース・ポ イエーティコスが

- (16)ブレンターノは、『分析論後書』第二巻第十九章で行われていることが帰納を通じた概念形成ではないと主張する(Brentano 1867) 213-215)。私はこの点に関する彼の解釈に賛同する。私の解釈では、当該箇所で行われていることは教育と学習による概念「把 究者もいる(Wedin 1988: 176-177) 握」である(酒井 2021: 19–20)。また、「『魂について』第三巻第五章が概念獲得にまったく関心を持っていない」と主張する研
- 17 つまり、私はここで Kosman 1995: 355に賛同し、「観想」が知性の第二現実態に関わると解釈している。
- 18 私と異なり、Theiler 1959: 142はその原因を示すテクストの一つとして、III 5, 430a24を参照する。
- その意味で私の解釈は、ブレンターノの解釈にその着想を得ている。 実際に『魂について』第三巻第四章では知性認識の主語として「知性」がしばしば用いられている (e.g. III 4, 429a22-24, 429b3-4)。 また、私のこの解釈は、ブレンターノがγ(神的ヌース)と理解している箇所をδ(魂のヌースの部分)と理解するものである。
- 20 『形而上学』A 巻において、不動の動者ないし神について説明していると思われる箇所で「それの実体[本質]が現実態(fig ri テクストのうちの前者の参照も含め、Kosman 1995: 353を参照。ただし私は、神や「意識(consciousness)」をめぐる Kosman の οὺσία ἐνέργεια) 」(Metaph. Λ6, 1071b20)とか「永遠の生命(ζωὴ ... ἄιδιος)」(Metaph. Λ7, 1072b28)と述べられている。これらの ヌース・ポイエーティコス解釈には賛同しない。
- Burnyeat 2008: 38は『魂について』第三巻第五章を「第一哲学、 神学、 形而上学」と特徴づける。 また、 私のここでの主張に関
- 22 村田憲郎氏の示唆による。 連するものとして、Burnyeat 2008: 40-41も参照

参考文献

Brentano, F. (1867) Die Psychologie des Aristoteles, insbesondere seine Lehre vom Nous Poietikos, Verlag von Franz Kirchheim

Burnyeat, M. F. (2008) Aristotle's Divine Intellect, Marquette University Press.

Carter, J. W. (2019) 'How Aristotle Changes Anaxagoras's Mind,' Apeiron 52 (1), pp. 1-28

Diels, H. and W. Kranz (1952) Die Fragmente der Vorsokratiker, 6" ed., vol. 2, Weidmann. [参照したのは第六版の原本復刻版である一九九六 年刊行のもの

Hamlyn, D. W. (1993) Aristotle De Anima: Books II and III, with Passages from Book I, (2nd ed. with a Report on Recent Work and a Revised Bibliography by C. Shields), Oxford University Press

Hicks, R. D. (1907) Aristotle De Anima with Translation, Introduction and Notes, Cambridge University Press

出隆訳註(1968)『形而上学』アリストテレス全集第十二巻、岩波書店

Jaeger, W. (1957) Aristotelis Metaphysica, Oxford University Press

Kosman, L. A. (1995) 'What does the Maker Mind Make?,' in Nussbaum and Rorty, pp. 343-358 金子善彦(2011)「アリストテレス」神崎繁、熊野純彦、鈴木泉 編『西洋哲学史 I ――

Laks, A. and G. W. Most (2016) Early Greek Philosophy, vol. VI, Harvard University Press.

松浦和也 (2019)「知性の離存性について」『ギリシャ哲学セミナー論集』 XVI, pp. 33-48 中畑正志 訳注(2014)『魂について』 新版アリストテレス全集第七巻、岩波書店

Nussbaum, M. C. and A. O. Rorty eds. (1995) Essays on Aristotle's De Anima, Oxford University Press

Polansky, R. (2007) Aristotle's De Anima, Cambridge University Press

Ross, W. D. (1924) Aristotle's Metaphysics: A Revised Text with Introduction and Commentary, vol. 2, Oxford University Press (1956) Aristotelis De Anima, Oxford University Press

(1961) Aristotle De Anima, Oxford University Press

and L. Minio-Paluello (1964) Aristotelis Analytica Priora et Posteriora, Oxford University Press

酒井健太朗(2020)『アリストテレスの知識論 (2021)「アリストテレスの抽象理論の射程」池田真治編著『抽象の理論をめぐる哲学史 「分析論後書」 の統一的解釈の試み』九州大学出版会 - 古代から近代まで ――』(| 抽象

「ある」の衝撃からはじまる』講談社

рp

と概念形成の哲学史」研究会・研究報告論集)、pp. 1-29.

Shields, C. (2016) Aristotle De Anima, Oxford University Press.

Theiler, W. (1959) Aristoteles, Über die Seele, Akademie Verlag. 高橋久一郎訳註(2014) 『分析論後書』新版アリストテレス全集第二巻、岩波書店:

Wedin, M. V. (1988) Mind and Imagination in Aristotle, Yale University Press. 内山勝利 et al. 訳(1997)『ソクラテス以前哲学者断片集 第Ⅲ分冊』岩波書店!

本研究は、JSPS 科研費 JP21K12837の助成を受けたものです。

(九州国際大学法学部法律学科・准教授)